

心に届く 信心真話

父母代表し謝辞の大役

【卒】

業生の父母を代表して、謝辞を述べてもらえませんか」と、次男が通う小学校から、中山紀子さん（48）に依頼がありました。小学校でPTAの役員をしている関係から、この話が来たのだらうと想像しながら、紀子さんはとても気が重くなりました。というのも、近所に住んでいる紀子さんの夫の

両親にいろいろと問題が起きてきて、最近ではそのことばかりきりになつていたのでした。義父は身体が弱つて入院療養となり、紀子さんは足が少し不自由な義母に代わつて、病院に通い、義父の世話をしていたのです。その最中に、義母が突然の病で世界するといふ不幸が重なりま

した。

「何でこんな大変な状態の私が、謝辞をしなきゃいけないの。できる人はほかにもいるはずなのに……」

「不満な思いを持ちながら、紀子さんは教会に参拝し、「今のこの状態では、とても謝辞を考える余裕はありません。どうさせて頂いたらいいでしょうか」とお届けしました。

【教】

「会館の先生からは、そういう状況だから、断るのもいいでしょうし、それでもさせて頂くと思うのもあなた次第。どちらになつても良いことになるよう、願わせて頂きましょう」という言葉が返つてきました。「断つたらいいでしょう」という返事を期待していた紀子さんは、そのあいまいな言葉に釈然としない思いでした。その後、義父の身の回りの世話や退院後の生活介護などに追われる毎日が続く、決心がつかないまま返事を先延ばしにしている間に卒業式が目前となり、もう断ることのできない時期になつて

【紀】

「今さら誰も代わつてくれません。私は車いすのお義父さんの世話でくたくた、子どもたちからはほつたらかしにされていると文句を言われるし、謝辞なんてとても書けそうにありません」と、今にも泣き出しそうな顔で話しました。

【卒】

先生はこの時、「大丈夫、書けます。お願いしていますから」と、今度のはつきりと言われたのです。教会から帰宅した紀子さんの心に、少し頑張つてみようかという気持ちが起こりました。いつものように家の事などを一通り済ませた後、疲れた体で机に向かうと、それまで書こうとしても進まなかつたペンがするすると動き、その夜のうちに原稿ができたのです。そうして迎えた卒業式当日、紀子さんは満場の参列者を前に、用意した

感謝の言葉を力強く読み上げました。緊張で手足が震えましたが、ふと視線を上げると、その先に次男の姿があり、その表情は「あれは僕のお母さんだ」と誇らしげにしているように思えました。

この時、「やらせてもらつて良かった」と、紀子さんは思いました。業式が終わり、教会にお礼参拝した紀子さんの顔には、大役を終えた安堵（あんど）感と、わが子へ何か大事なものを伝えられたという達成感のようなものがにじんできました。いろいろと悩みながらも、起きてくることを紀子さんなりに逃げずに受け止めることができたことは、ささやかな自信にもなりました。

お義父さんの介護はもとより、これから先どんな出来事が待っているかは分かりませんが、神様とともに一つ一つ乗り越えていきたいと、紀子さんは願っています。

「やらせてもらって良かった」



「やらせてもらって良かった」

※このお話は実話をもとに執筆されたものですが、登場人物は仮名を原則としています

東北地方 太平洋沖地震

救援募金窓口を開設

このたびの東北地方太平洋沖地震によって、被害をこうむられました方々に、心よりお見舞い申し上げます。

教会、信奉者関係の被害状況につきまして、確認でき次第、逐次お知らせいたします。また、救援にかかわる募金窓口を開設しましたので、ご支援のほどお願いいたします。

3月13日

金光教本部教庁

義援金送付先

加入者名：金光教本部教庁 災害救援社会活動資金
郵便振替口座番号
01200—3—14845
※お振り込みの際、「東北地方太平洋沖地震義援金」と明記してください。（振り込み手数料をご負担ください）

本部へ持参の場合

本部広前お結界へお届けの場合は、教会名、氏名とともに封筒の右上部分に「東北地方太平洋沖地震義援金」と明記してください。本部教庁への持参は、平日は本部総合庁舎6階経理室、休務日は境内案内所へお持ちください。

義援金に関するお問い合わせは、

金光教本部教庁（TEL 0865—42—3111）まで